

風見幽香と 一寸法師



成人向



それは妖怪だったり、
迷い込んだ人間だったり
するけれど



私の向日葵畑には
客が多い



こんな小さなお客さんは
これが初めて



何だか新しい玩具を
拾った気分♪

うふふ♪

これは迷子を
見つけたというより、





お、お姉さん誰っ？
ここはどこっ？

私？私は風見幽香、
あの向日葵を
管理している妖怪よ♪

管理？え？
え？

感謝しなさい？
倒れてた貴方を介抱して、
我が家のお風呂に入れて
あげてるんだから

この向日葵で探し物？
まあ、それくらいなら
私が後で探してあげるわ

キャッ



ただし、せつかくなんだし、
しばらく私の退屈しのぎに
付き合いなさいな♪

むう……

はあ……小槌が見つかるのは
助かるけど、何か面倒なこと
なっちゃった……



カッ



……ん？このお姉さん
今何て？お風呂？
ここ浴室なの？
そういえば今自分裸だし、
お姉さんも裸だし

ていうことは今
自分がある場所は
お姉さんのお……
お……



もう、ダメッ

ぎゃあッ!

「うううう」めんなさい
私急いでるんでっ
すぐに出ます

んぎゅっ



ぐっ



あ、あうう..
く、くるしっ..

みち、みち、

とにかくっ
せつかく私が泥だらけの貴方を
洗ってあげようとするのに、
逃げるのはひどいでしょ?

とにかくっ



だって、貴方私の向日葵畑に
落ちてたのよ?

私の私有地に落ちてたって
ことは、私が好きにしても
いいってことよね?

落ちてたって、わ、私は
物なんかじゃっ

きゅっ
きゅっ♡



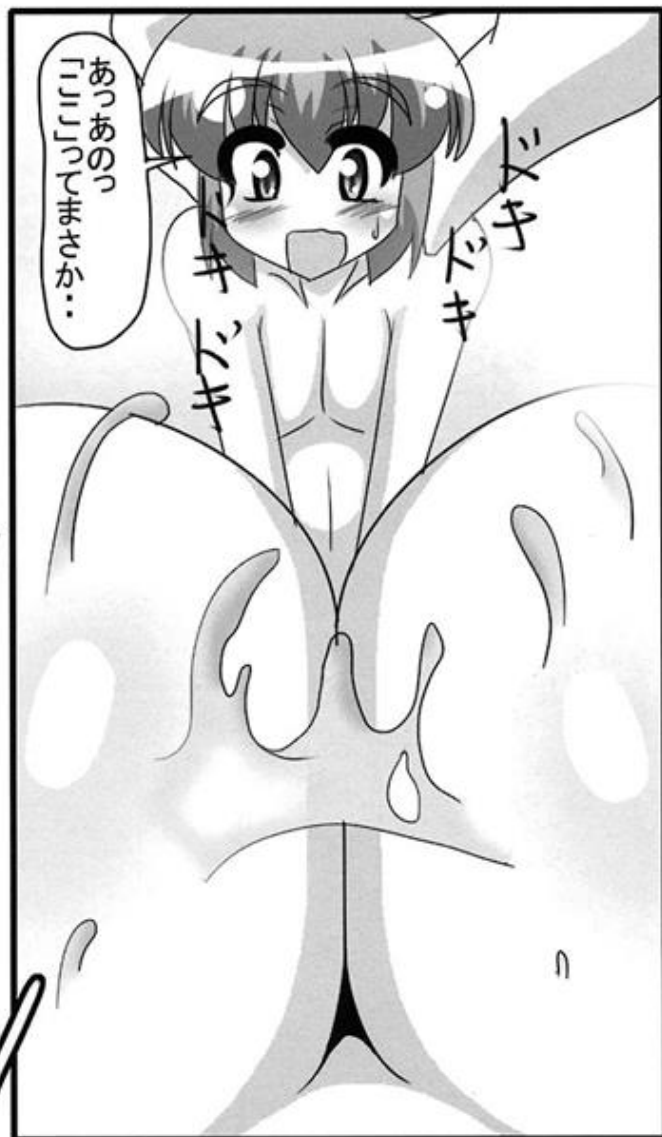
さ、お風呂にも浸かったし、
身体洗いましょ

貴方に拒否権は
ないのよ

うわっ

ざっぱっ







ん...やだ、
この子すんじい
勃起してる...

硬くなったおちんちんが
私の乳首、何度も何度も
擦ってる...



思った以上に
面白いことに
なりそう♪

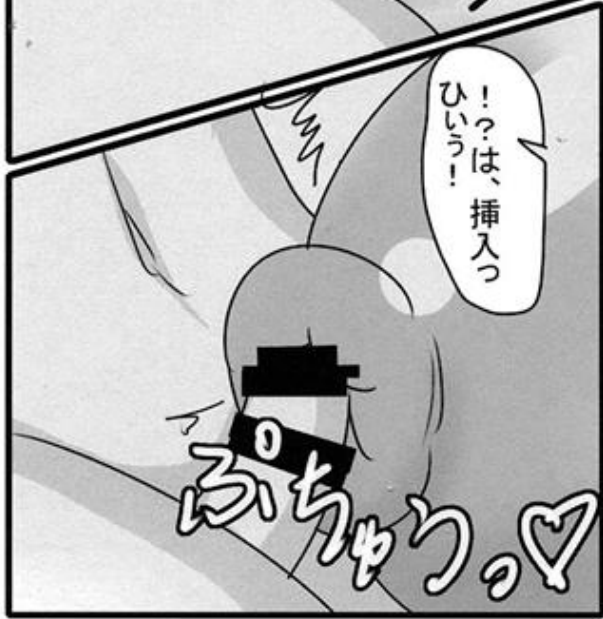
最初はただの
遊びのつもり
だったけど



こんなに小さいのに...あんなに♡



お姉さんの乳首が擦れてえ...



!??は、挿入っひいう!

ふちゅっ♡



お、お姉さんっ私のおちんちんなんか変っ

はうっはうっだんだん激しくっ

ずりゅっずりゅっずりゅっずりゅっ



はあ、はあ

お姉さんの乳首の中にお白おしっこおいつぱい中出ししてっ!!

!??えっだ、ダメ!そ、そんな強く押さえたらっもうで、出ちゃっ、あ、あっあっ!

びゅっ!ぎゅっ!



と、止めて!動かすの止めてえ!おしっこ出ちゃうっ!!

いっわっ出してっ!!



あっ、ああっ！

あんっ♡♡
出てるっ♡♡

乳首の中に
びゅるっ♡♡

んあああああ
あああっ！

びしょっ!!



泥は取れたけど、
お汁でぬるぬるに
なっちゃったわねえ

まだ…

男の子はね、気持ちいいと
おちんちんからお汁が
出ちゃうの



あんっやだあ
小さいくせに
こんなにたくさん♪

今のが
初めての射精
だったのお？

しゃ…しゃ…
しゃ、せい？

ぬるん

ぬるん



まだ足りない…っ

でもあまり長風呂すると
のぼせちゃうから

ベントに…
いきましょ？



お・ま・た・せ♪



私のお気に入りの下着
なんだけど、
似合ってるかしら？

……で、どう？
今の気分は？



ドキ
ドキ
♡

はあ
はあ
はあ

今から貴方、
私とセックス
するのよ？



おちんちん、そんなに
ヒクつかせてるんだもの♪

勿論嬉しい
わよねえ♪

ひゅん

ひゅん





私のおっぱい、
全身で味わいなさい♪
たつぷり押しつぶして
あげるっ

お風呂でした程度じゃ、
物足りないでしょ？

みちっ

ぎゅーっ うっ



体重かけて
圧迫したり…

んぐんぐっ

みちっ



さらにこうしてっ
左右に擦り動かしたり

すりゅっ



ああん♪
おっぱいの下で
硬くなってきたのが
分かるわ♪

気に入った？私の
爆乳圧迫祭り♪

はあっ
はあっ

すっ

すっ

すっ



あっあっ
だめえ！
おちんちん
押しつぶされてっ

ひゅっ

ぬちゅっ

ぬりゅんっ

またっまた出ちゃう！
白いのでちやううう



こんどは、

こっちで...
ね？

んふふ、
まだ出しちゃ
ダメよ？

にゅる..



だからすっぽり
食べちゃった♡

ほら、私のおっぱいが
貴方の身体
美味しそうって♡♡



ぎゅ♡

みちゅ♡



ブラジャーで締め付ける分、
ぎゅぎゅぎゅう圧迫してる♪

あ、あうう

さっきより乳圧
凄くなったでしょ？

ああん、私のおっぱいが
我慢できなくなつて、

貴方をもぐもぐ
咀嚼し始めちゃったあ♡

おっぱいが
交互にい

ぐんぐん

むに

むに

ちゅちゅちゅちゅ

ずりゅん

ずりゅん





うう、お姉さんのおっぱいが何度もうごめいてっ

びく

びく

全身ねっとり舐められてるみたいだよお



あうう！

はっはっ

ぬりゅ

ずぬ



びるるるる...

びるる



あっあっ

あっ

こんなのっもう我慢できな...っ！あっ...あっ！

びゅ

びゅ...

カカカカ



あん…やだ、
この子いきなり
激しくっ

ぽぽんっ
ちゅんっ



ぽぽんっ
ちゅんっ
ちゅんっ

カチカチになったおちんちんが
おっぱいに何度も
押し付けられてる

こんなに小さいのに
凄く硬い…っ



やだ、私も
変な気分にな
つてきさちゅんっ…

そんなに必死で
腰激しく動かれたり
なんかしたら…

はあ

はあ

ちゅんっ

ちゅんっ



ぽぽんっ

ぽぽんっ



いきそう
なんだ…

ちゅんっ



はあ

はあ

はあ

はう、もうダメ、
出るう...っ

はあ
はあ

ちゅ♡

ん

ちゅ

る

ん

ちゅ

あんっ出ちやうっ？
精子出ちやうっ？

おっぱいの中に
精子ぴゅっぴゅ
出しちやうっ？

全身おっぱいに
しゃぶられながら
精子中だしちやうっの？



いいわよお出して！！
精子ぶちまけてっ！！

あっ！！
出る！！出るっ！！



ああああっ！！



んあああつ！

ああん精子
出たあ♡♡

か
か
か

4
H

7
0

7









あああん♡♡



ああんっ
あっっ

小さいおちんちんに
イカされちゃうっ



ああっ
私もまたっ！

あんっ私っ
もうイキそうっ

こんな小さな子と
セックスしてっ
イカされちゃうっ

ああんイクっ
イクイクっ！
一緒にっ
一緒にっ……



視界に入っている彼女は、僕の身長をゆうに超える、大怪獣並みの大きさだったのだから。

「なに、これ…」

「…ん」
どこか冷たい地面の上で、僕は眼を覚ました。
何だかすごく寒い。自分の体を見ると薄着のシャツ一枚に剥かれ、下には何も穿いていないという有様だ。それでも、まだ残暑が厳しい今日この頃感じる寒さにしては、いささか寒すぎる。

ブルツと一震えして、着ているシャツを下半身ぎりぎりまでかぶせようとする。少し大きいサイズのシャツは容易に下腹部を隠すことができ、おかげで股間がスースーするという事は無くなった。

それにしても、ここは一体どこだろう。やっと身边に余裕が出来て、辺りを見回した時、僕の思考は一瞬固まった。

「…!?」

目の前ですう…すう…と寝息を立てている女性。綺麗な緑髪をした彼女のことを、僕は知っている。

風見幽香。向日葵畑に住居を構える彼女は、僕はもとより、大人たちの間でも恐るべき妖怪としてその名を知らない者はいなかった。

しかし、今はそんなことなどどうでも良かった。なぜなら今、僕の

思わず声が漏れてしまう。さらに周りを良く見てみると、今自分が乗せられている場所が彼女の机の上で、どうやら彼女が巨大なのではなく、自分が小さくされているようだった。大体十センチぐらいか…。そうやって、自分の置かれた状況がだんだんと分かってくるにつれ、逆にじわりじわりと高まってくる恐怖心。

自分の身長は十センチ。

目の前に居る巨人は、誰もが恐れる大妖怪。

(逃げなきゃ…!)

しかし、逃げようとしても足が動かない。きっと足がすくんでいたのもあったのだろう。じりじりと後ずさりすることぐらいしかできず、その場でしばらく固まっているうちに、僕の視線は彼女の全体像からとある一部分に移っていた。

(『大きい』…)

今度は幽香の体軀のことではない。彼女がテーブルの上に前のめりに眠っていることで、むにゆうっとテーブルに押し潰され、広がる、物凄く大きな乳房。

それはきつと、僕が普通サイズの時に彼女を見たとしても、相当の大きさを持つていただろう。それが今こんなに小さくされていると、ちよつとした山のように僕の目の前に聳えている。

(触ってもいいかな…)

いやダメだ！僕はすぐさまその思考を振り払う。今こそこの大妖怪から逃げられるチャンスなのに、それを捨てて、みすみす危険な目に遭いに行くなんて！

しかし、一度頭の中をよぎった願望は、自然と僕の体を前に向かわせようとする。あんなに後ずさりできなかったのに、前に進むことは容易くできてしまう自分の単純なスケべ根性が憎くて仕方ない。

何とか幽香を起こすことなく、彼女の乳房の目の前まで歩みを進める。少し離れたところから見てもかなり大きかったが、いざ近づくといささかその大きさに圧倒されてしまいそうだ。

テーブルにのしつ、と載せられた巨大な二つの双球は、僕の身長と同じか、少し大きいぐらい。しかもそれが着ているワイシャツの中間にパンパンに詰まっているのだから、いやらしいことこの上無い。

ワイシャツの間から少しだけ覗く透き通るように白い肌は、まるで僕を誘惑するかのようだ。

僕はゴクリと喉を鳴らす。触ったら、どんな感触なんだろう…

(ちよつとだけなら、触っても…)

バクバクと高鳴る鼓動を押さえ、そつとワイシャツの隙間から、手を差し入れてみる。そして、幽香を起こさないように、その柔肌にそつと、そつと…

—むにっ

うわっ、柔らかか…想像以上の弾力に、僕は思わずびくつと反応してしまう。女の人のおっぱいって、こんなに柔らかいのか…!?

必死に押さえていた鼓動が再び高まる。と、それと同時に、僕の中に、とんでもないアイデアが浮かんでくる。

(こんなにおっきいおっぱいを、ぎゅーってできたら…)

興奮のあまり短絡化してしまった思考は、逆をいえばとんでもなく危険なアイデアだった。確かに今こんなに小さくなっている以上、全身で幽香の爆乳を堪能することが出来れば、どんなにか気持ちのいいことだろう。しかし、そんなことをしているのが幽香にバレたなら、ひどい目に遭わされるなんてものではない。相手は幻想郷最凶の妖怪。確実に命を取られてしまうだろう。

いくら興奮しているとはいえ、僕自身この変態的なアイデアに狼狽した。しかし今このような状況に置かれ、そしてこのチャンスを逃したならば次は無いだろう？と、その狼狽を打ち消すのにそれほど時間はかからなかった。

※

目線と同じ高さにある、ワイシャツのボタンに手をかける。ほんの布ズレさえも幽香を起こすには十分。僕はこれ以上にならないほど慎重な手つきで、大皿ほどのサイズのボタンを外していく。

—ぶちん、ぶちん、

ボタンが一個、また一個と外れるたびに、その布の間から艶やかな柔肌が見えてきて、僕の興奮を高めてくる。実はその興奮のせいで、僕の手つきもだんだんと大雑把になっていたのだが、なぜか不思議なことに幽香が起きるといふ気配は無かった。

そうして、僕の手が届く全ての範囲のボタンを外し終えると、僕の目の前には胸の谷間を露わにしてもなおも眠る幽香の姿があった。

「よ…、よし」

一仕事終えたという達成感と共に、幽香の寝息が体にかかるのを感じる。心なしか、その感触も甘く、心地よい気がする。

はやる気持ちを抑え、僕は改めて幽香の乳房に触れてみる。相変わらず、搦きたての餅のようにぶにぶにすべすべとした肌。さつきよりも深く手を押し込んでみれば、極上の弾力を持って押し返してくる。そうして、僕はゆっくりと、幽香の胸の谷間に少しずつ体を入れていく。無論、全身を入れるなどというような高望みはしない。自分がおっぱいに抱きつけるぐらい、あわよくば半身を谷間に収めることが出来ればそれで良かった。

しかし、そんな危惧も全くの杞憂だった。すべすべした柔肌は驚くほどに僕の体を優しく受け入れ、半身どころか体の左半分四分の三を収めるところまでいってしまったのだ。

予想外のことに、僕は歓喜した。ほぼ全身で女性の乳房に挟まれるなど全く体験したこともなかったし、もはやこの時点で理性などあらかた吹き飛んでしまっていた。

…思えば、ここである程度怪しむべきだったのだ。ここまで深入りして、幽香が相変わらず目覚めないということに。

手を目いっぱい伸ばし、ぎゅうつ、と左の乳房に抱きついてみる。と、僕の体に電流のような快感が流れる。

うううつ、とうめき声をあげ、僕は抱きつく力を強くしたり弱めたりしてみる。気持ち良い。どんな動きでも受け止めるかのように弾み、

さらに奥底から強い弾力を持って跳ね返してくる幽香の柔肉に、僕はいつしか夢中になっていた。

—ぎゅっ、ぎゅっ

布越しとは言え、十分にその柔らかさと大きさ、そして暖かさを感じ取れる幽香の乳房。それを意識するにつれて、ムクムクと大きくなってくるのは僕の下腹部。そして、下腹部からだんだんと突き上げてくるような何かが、少しずつ僕の体を苦しめてくる。

早くその苦しみから解放されたいと、いつのまにか僕は幽香の柔肉に腰を打ちつけるようになっていた。そして、もう少しで解放されそうになるといふ、その時だった。

—ぎゅううううううううう

背中側から何かに強く圧迫され、僕の体は幽香の乳房に深く沈む。快感よりも苦しさが先行し、僕は堪らずジタバタと暴れようとするが、身動きをとることが出来ない。

いや、むしろこの時に心配すべきは別の事柄だったのかもしれない。その何かによりぎゅっ、と掴まれ、胸元から引つべがされた時に、僕はようやく自分がかかなり危険な状況に置かれているということを理解できたのだから。

「あっ……！」

上空に持ち上げられたと同時に、僕は言葉を失う。僕の視線の先にいたのは、僕の体を摘み上げている主にして、先ほどまで僕がさんざん乳房に抱きついてきた、風見幽香その人だったのだ。

※

—一気に先ほどまでの劣情が引いて行くのが分かる。

—まずい

—やばい

—殺される……！

しかし、そんな僕の思考とは裏腹に、幽香は泰然自若としている。あたかも、僕がこれまでやってきた悪行を見抜いていたかのように。

「……気持ち良かった？」

フツ、と一息ついた後の柔和な声。しかし僕はその言葉にさえ、恐怖でビクン、と体を跳ねあげる。そんな態度に幽香は、そんなにビビるなら、最初からやらなければいいのに、と半ば呆れつつも、続ける。

「まさか、あんなに激しく腰を振って、私が目覚めないとも思ったの？…まあ、罨が予定外に暴発して、貴方に迷惑かけちゃったから、多少のことには目をつぶってあげてたけど、まさか私のおっぱいに欲情までするなんてねえ」

子供とは言え、男って単純ね、と、幽香の視線が少し侮蔑交じりになる。これにはまさにその通りだと言いつ返す言葉もなく、僕は幽香に吊るされたまま、俯いてしまう。

しかしそんな僕の様子を見て、何か思う所があったのだろうか、幽香の指先が、するりと僕の体を撫で上げる。すべすべした親指に撫でられ、敏感に仰け反ってしまう僕の体。しかしそれだけではない。その指先は、今度は僕の着ている服の中にまで入って来たのだ。

「ひゃっ！何を…！」

すりすりと、指で僕の下腹部を撫でる幽香。その官能的な動きに、僕はなすがままにされてしまう。下腹部を撫でられる快感と、人形のように扱われる自分の小ささを思い知らされ、僕の股間は再びむくむくと怒張し始めていた。

「あはっ♪また勃った♪」

うれしそうに言う幽香。その顔は侮蔑でも柔和でもない、やや艶を含んだような表情。そしてクスリ、と笑うと、幽香は空いた方の手で、上着のボタンを全て外してしまう。

「ぶるんっ！」

先ほどまで拝むことのできなかった、幽香の爆乳の全景。サイズが合わなかったのだろうか、艶やかな黒ブラのカップからはち切れんばかりの乳肉が溢れだして、とても官能的な様相を呈している。

そんな様を間近で見せられ、しかももう片方の手は相変わらず股間を擦っているのだから堪らない。僕の脳内は再び、幽香のおっぱいことのでいっばいになってしまった。

と、その時、幽香の指の動きが突然止まり、僕はテーブルの上に下ろされる。そして、その目の前には黒ブラに包まれた乳房をどん、とテーブルに乗せた幽香。そして告げられる衝撃の一言、

「いいわよ、好きにして」

…えっ、と思わず聞き返してしまう。好きにして、いいって…

「だから、私のおっぱい触りたいんでしょ？いいわよ、触っても」
まさかの発言、まさか裏があるんじゃないかと訝る僕に対して、じれったいわねえ、と幽香の左手が背中からやってきて：

—ばふん…

物凄く懐かしい、柔らかく、暖かな感触。しかも今度は半身だけではない。全身を使って、幽香の乳房を感じ取ることが出来る。

もうここまでくると、猜疑心よりも嬉しさが一気に逆転して、僕は泣きそうな気持ちで、甘えるように幽香の乳房に体全体を擦りつける。

「ま、誤射で締めちゃったわけだし、お詫びといっちゃ…ね」

そういう一見そっけなさそうな幽香の言葉も、少し弾んでいるようだった。

※

背中から押し付ける手が、僕の体を上下に擦り上げ始める。と同時に、抱きついていた時よりもさらに強い快感が僕の頭を駆け巡る。

しかしそればかりではない。幽香の手が僕を擦り上げていくうち、

僕の体は少しづつ幽香の乳房が作る深い谷間の中に入れられていく。両方からのしかかってくる濃厚な乳圧に、僕は逃げようにも逃げる事が出来ない。いや、逃げるといふ感情を失ってしまったというのが妥当なところだろうか。それほどに「谷間に全身を挟まれる」というシチュエーションは予想以上に最高で、快感だったのだ。

「はうっ」

またもや情けない呻き声を上げつつ、何とか僅かな余裕を見つけて身をよじれば、瑞々しく弾力に溢れた肌に手足がむにむにと埋まる。そうして、幽香の片乳に体の前半分をあてがったところで、谷間の奥まで突っ込んでいた幽香の手が離れる。と、

—ぎゅうううううう

幽香が両方から乳房を押しさえたのだろう。彼女の両の乳房が波のように盛り上がり、僕に襲い掛かってくる。そのおかげで僕の体は、圧迫された幽香の胸の谷間に頭から足先まで埋まってしまった。

肺から一気に空気が抜けていく。先程までは心地よい程度の圧迫感だったのが一転、ともすれば骨の折れてしまいそうな強烈な乳圧に、僕は本能的に悲鳴をあげてしまう。

「く、苦しい…!!!」

ひしゃげたカエルのようなポーズをとられ、もうだめだと思ったその時。その乳圧から解放され、僕は弾む幽香の乳房にぐったりと倒れ込む。その様子にクスクスと笑う幽香。

「ちよつと胸を寄せただけなのに…」

そんな僕の反応が面白かったからなのか、それとも最初からそうするつもりだったのか、幽香は胸を弾ませるように両胸を圧迫し始める。

—ゆさつ、ゆさつ

さきほどの苦しさとは違い、ほどよい弾力が僕をくすぐる。しかもそれが波打つように僕の体を刺激し、僕は先ほど感じた奇妙な快感が、股間から沸き上がってくるのを感じる。

その快感をもっと味わいたくて、僕は乳房に体を擦りつけ始める。幽香も、僕の快感に気付いたのだろう。胸を動かす動きがだんだんと激しくなり、たぶんっ、たぶんっという音が聞こえてきそうだ。

柔肌に擦られる下腹部、股間の先端から根元までを何度も擦り上げられるたびに高まる快感は、その強さの余り次第に僕の体を動けなくしていってしまう。

…いや、どうやらそれだけではないようだ。少しずつではあるが、自分の収まっている部分があつくなってくる。体の内側から沸き上がってくる快感も、だんだんと物理的なものに変わってくる。

(罫の魔法が切れてきたのかしら)

幽香の脳裏をちらりとよぎった疑問が、しばらくすると確信に変わってくる。先ほどよりも二倍、三倍に大きくなってくる少年の姿が、幽香の目から見ても明らかに分かった。

しかし一度火のついてしまった幽香にとって、そのようなことはそこまで大きな問題にはならない。むしろ大変なのは少年の方だ。ただでさえ気持ちのいい乳圧が、さらに強くなってくるのだから。

もうそろそろ潮時かしらね…幽香は仕上げとばかりにいつそう激しく胸を擦り始めた。

※

僕の快感は限界に達していた。自身の体が元に戻ってきていることの副作用もあるのだろうか、ともすれば暴発してしまいそうになる。

「うあつ、やばい、出る、出ちゃう…っ！」

どんなに幽香に懇願するように声を上げたところで、もはや逃れる術など無い。とうとう僕は観念したように幽香の乳房をぎゅううつと抱きすくめた。それに答えるように幽香も強く乳房を寄せる。

「ムギユツ、うあ、あつ、あああああつ……！」

乳房に強く股間を押し潰されたことがトリガーとなったのだろう。まともな言葉になつていない嬌声を上げ、僕は幽香の乳房に白い欲望を叩きつける。

と同時に、みしつ、みしつという音を立て、一気に元のサイズへと戻って行く僕の体。

「お…おおつとつとととー！」

あまりに急な変化に、さすがに僕の体を支えきれなかったのか、僕と幽香は派手な音を立てて椅子から崩れ落ちてしまった。

「わっ…わわっ…ごめんなさい！」

幽香の体を組み敷いた格好になり、僕は思わず謝ってしまう。しかし、その言葉の終わる前に、僕の体は逆に幽香に組み敷かれていた。えっ、と思考が固まる僕の股間に、スリスリと擦りつけられてくるのは幽香のむっちりとした太股。それが先ほど自分が出してしまったものと絡まり合い、ぬるぬるすべすべとした感触と、柔らかな感触を、敏感になっている僕の下腹部に叩きつけてくる。

再び僕の心に沸き上がってくる、ムラムラとした気持ち。そして、耳元でつえばむように聞こえてくる、幽香の甘い囁き。

「ごめんなさいって思うなら、まだまだ付き合ってもらおうかしらね」

…どうやら、彼女の中に着いた火は、未だ消えていないようだった。

終

◆後書き◆

はじめまして、またはこんにちは。「妄想族の巣窟」の、赤袖です。
今まで「ちゃらむ〜」のHNで活動しておりましたが、以後「赤袖」での活動になります。
「赤袖」の初の個人誌をお手に取ってください、ありがとうございます。

今回は体格差ックス、というか「シュリンカー」という、中々ニッチなフェチ漫画に挑戦しました。
元々女性>>男性の体格差のあるエロは大好きでしたが、ここまで体格差のあるエロをガッツリ描いたのは今回が初めてですw

大きさの好みはいろいろあると思いますが、私は15センチ〜20センチくらいの小ささが一番好きです。
全身を挟んだら丁度おっぱいに首から下がすっぽり隠れるくらい！
東方輝針城の針妙丸が割とこれくらいの大きさに感じましたので、幽香さんとのせくーすのお相手になってもらいました。
ショタ化してるのはいつも通り。

体格差ックスで描いてみたいことは大体描くことができたと思ってるので、ほぼ満足できました。
もっとニッチな、例えばもっとおっぱいやお尻で圧迫祭りしたり、ブラ着衣パイズリしているうちにだんだん身体が大きくなっちゃったり、全身包まれたまま射精して全身自分の出した白濁液まみれになったりとか、そんなエロも描きたかったのですが今回は一応断念。
また挑戦したいですね。
もっとエロいの！

今回はpixivやツイッターでお世話になっているあぬさんに、ゲストをお願いしました。
今までゲスト様に絵や漫画を描いて頂いておりましたが、小説をお願いしたのは今回が初めてです。
編集で不安もありましたが、素晴らしい作品をありがとうございました！
正直私がシュリンカーに目覚めたのは氏の作品の影響が大きいですw

次回はまだ未定です。
輝針城ではわかさぎ姫と雷鼓さんがすごく好きなので彼女たちも何か描きたいです。
もしくはまた黒下着幽香さんで何か。
ほんとにも〜黒下着幽香さん流行って！！
大好きだからっ！！！！！！

ではまた次回〜 /s

赤袖



風見幽香と一寸法師

発行：妄想族の巣窟

発行者：赤袖（あかそで）

発行日：2014.2.2

印刷：ねこのしっぽ様

ID=16443（pixiv）

原作：上海アリス幻楽団様

禁止事項：

- ・ 18歳未満者による購入、所持、観覧
- ・ 無断転載、複製、アップロード